日中経済交流研究会新聞

インタビュー vol.44

外国人も日本人も関係なく、一人の人として スポーツを通じて平和と社会に貢献

～ラグビー人としてビジネスマンとして、日本を愛し続けた38年間の歴史～

NPO法人日本トンガ友好協会　代表　ラトゥ・ウィリアム志南利 氏

所在地：埼玉県熊谷市／設　立：2021年4月26日

「日本ラグビー界の歴史を変えた」といわれるラトゥ・ウィリアム志南利さん（元日本ラグビー代表選手）。彼の日本におけるラグビーの歴史は1985年に19歳でトンガから大東文化大学に留学したときから始まりました。当時のラグビー界は85年までが新日鉄釜石の全盛期で、その後は神戸製鋼の黄金期へ。往時に懐かしさを感じる人も多いのではないでしょうか。

日本ってどんな国?日本留学への道のり

トンガから日本へのラグビー留学の歴史は、ホポイ・タイオネ、ノフォムリ・タウモエフォラウの両氏から始まります。彼らに続いてラトゥさんは2期生として来日。日本は「アメリカと戦争した国」ということで、あまりよいイメージではなく、周囲は全員猛反対。日本ってどんな国だろう…。しかし反対を押し切って来日すると180度イメージが変わりました。トンガは「フレンドリーアイランド」というニックネームで呼ばれていましたが、日本のほうが何倍もフレンドリーだと感じたそうです。

トンガで日本語を全く勉強していなかったため、来日1年目はとにかく日本語の猛勉強。2年目から大学へ入学し、経済学と経営学を必死で勉強しました。大学時代はラグビー日本一を2回経験。まさに文武両道というのは彼のことでしょう。

海外ビジネスマンと社会人ラグビーの二足のわらじを履く

大学卒業後は、三洋電機に入社し社会人ラグビーの道へ。海外企画グループに配属されビジネスマンとしてシンガポールと日本をまたいで業務用空調機の生産に携わりました。今では信じられませんが、1990年当時はシンガポールでの現地生産でも十分コスト的優位性がありました。

ラトゥさんは英語と日本語を駆使し、部品や図面を現地へ供給し生産や品質管理を担当。

一般社員と同じように夕方5時までみっちり仕事をした後、6時～8時までのわずか2時間でラグビーを集中練習、土日は休みなく遠征試合。若かったから体力もあったし、何よりも楽しくて仕方なかったと終始笑顔のラトゥさん。「スポーツだけではだめ。一生懸命たくさん勉強して力をつけないと。その後の人生があるのだから…。しっかり勉強したら何だってできる！」と力強く語られます。

日本代表として3大会連続ラグビー W杯に出場

当時のラグビー界は平尾誠二や大八木淳史など素晴らしい選手がいて、一緒にプレーできることが楽しかったし、何よりも人として尊敬できる人ばかりでした。そして日本代表に外国人が一人もいなかった時代、初めて日本代表に選ばれた外国人選手がトンガ人でした。日本ラグビー協会から正式に認定されました。ラトゥさんは「外国人とか日本人とかは関係ない。ただ日本のために一生懸命プレーすれば必ず日本のレベルは上がる。時間の問題だ」と感じたそうです。

トンガの選手の活躍と日本ラグビー振興のためにNPO法人を設立

しかし彼ら全員がトップチームでプレーし続けるとは限りません。正式契約もなく来日し、ケガでプレーできなくて困っている選手もいます。そんな彼らを助けたい、そして日本ラグビーの発展と両国の懸け橋になりたい、そんな思いでNPO法人設立をめざしました。しかし銀行口座開設から始まり、道のりは簡単ではありませんでした。

海底火山噴火、日本人の温かさを再認識

NPO法人を設立後、さあこれから活動と思った矢先、今年1月15日に海底火山の噴火が起こりました。広島原爆の数百倍に相当するエネルギーといわれ、通信手段である海底ケーブルが津波で損傷。噴火前は新型コロナウイルス感染者がゼロでしたが、海外の支援物資船で感染が確認されます。支援をとるか、新型コロナウイルス感染拡大のリスクをとるか、政府も頭を悩ませました。この有事にラトゥさんも急きょ、義援金口座を作り最優先として活動しています。

日本の人たちからの支援に日々温かさを実感し勇気をもらっています。今度はラグビーを通じて日本の人たちに勇気と感動で恩返しをしていきたいと思っています。

日中経済交流研究会　広報委員会
文：（株）Pink Rose　廣瀬みゆき